

校長室の窓

大和町立小野小学校
校長室だより No.48

平成29年12月4日（月）発行

いのちの授業

「日野原重明さん」の名前を聞いたことがある人は多いのではないのでしょうか。著書もたくさんありますし、テレビにも出演していました。今年の7月に105歳でお亡くなりになるまで、多方面で大活躍でした。

特に有名なのは、日本で初めて「人間ドック」を始められたことです。また、よど号ハイジャック事件に遭遇してしまった後に「一時は死を覚悟したが、後は与えられた命、自分の命は社会のため、人のために使おう」と多くの人に「生きること」を伝えた方でもありました。

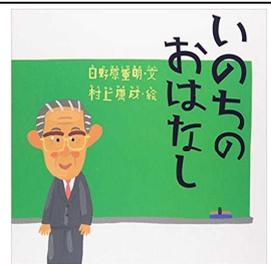
先日、県北部小学生が交通事故に会い、10歳の命が終わってしまいました。知っている方のお子さんでしたのでショックでした。座間市では自殺願望の女性を悪用した事件がありました。「いのち」について、子供たちなりに考える機会とするために、校長講話で日野原重明さんの話をしようと思っていました。

しかし、小学校1年生から6年生まで「考える力」「受け止める力」に大きな差があります。校長講話はそういう意味で、「どんな話をするか」いつも悩むのですが、今回の日野原さんのことを「どう伝えるか」は、特に難しいと感じました。

そこで、私は日野原さんの考え方や生き方を講話として伝えるよりも、日野原重明さんの書いた「いのちのおはなし」の読み聞かせをしよう、と思いました。このお話は「95歳のときに医者として活動している日野原先生が10歳の小学生に向けて『いのちの授業』をしたこと」を絵本にまとめたものです。今回の校長講話内容は、著作権の関係からエッセンスのみ紹介します。

※講話ではプロジェクターに映して読み聞かせをしました

- 日野原先生は、黒板に端から端まで線を引き、0、10(小学生の年齢)、95(日野原さんの年齢)、100と年齢を線で表し「長さ」「時間」をイメージさせます。
- 「いのちは、どこにあると思いますか？」と日野原先生は、子供たちに尋ねます。そして聴診器で互いに心臓の音を聞き合ったりします。
- 子供たちは「いのちは、からだにある」と思うようになりますが、日野原先生は「いのちは、みんなが持っている時間なのですよ。」と言うのです。
- 「これから生きていく時間、それがきみたちのいのちなのですよ。」と言いました。みんなは、自分のいのちを、どんなふうにつかおうかと胸がいっぱいになりました。



いのちのおはなし(日野原重明著) 講談社 より

特に、強く訴えるストーリーではなく、じんわりとくるような内容です。しかし、小学生にも読めるように平仮名付きで「あとがき」に、とても大切なことを書いています。そこも読みました。

人が生きていくうえで、もう一つ大事なことがあります。それは「ころ」です。おたがいに手をさしのべあって、いっしょに生きていくこと。ころを育てるとは、そういうことです。自分以外のことのために、自分の時間をつかおうとすることです。

「いのち」や、いのちをどうつかおうか決める「ころ」は見えませんが、見えないものこそ大切にすべきです。空気は見えませんが、人が生きるのに大切だということに似ています。

自分のもっている自分の時間、それが自分のいのち。

きみたちはこれから、そのことをよく考えて、生きていってほしいと思います。

「あとがき」の一部を上に乗せました。「自分のために時間を使う」だけでなく、「自分以外の人のためにも時間を使う」ような「いのち」の在り方を考えられるようになれば、「自殺願望」はなくなっていくのかもしれない、と思いました。

交通事故や災害からも身を守るようにし、自分のためにも、自分以外の人のためにも「いのち」を大切に生きていく人間になってほしいと思いました。